

# 明治時代の伊庭一二景

—東近江市伊庭町の近代の風景—

東 幸代

人間文化学部地域文化学科

## はじめに

前近代の人々は、優れた風景<sup>1</sup>を目にしたとき、その風景を絵画や漢詩、和歌などの作品として表現してきた。また、時として、それらの風景は「八景」や「三景」のように定数化されることもあった。

中国の「瀟湘八景」にならい、ある地域における8つの優れた風景を八景として選ぶ風景評価の様式は、東アジアにおいて発達し、日本においても中世以来の長い歴史をもっている。日本における受容の特徴は、景物に合わせて地名を限定することにあった。景物が固定され、それに見合った地名を選定することにより、八景は各地に展開したのである。公家の近衛信尹の和歌が添えられている「近江八景」はその代表的なもので、近江八景になぞらえた八景が各地で選定された<sup>2</sup>。



図1 伊庭町の位置

一方、近代以降も八景選定はおこなわれているが、その目的や内容は前近代とは異なっている場合がある。例えば、昭和24年(1949)に滋賀県と琵琶湖観光協会による公募をもとに、「琵琶湖八景」の選定がおこなわれている。その評価基準は、景物を近江八景になぞらえたものではなく独自のもので、目的は観光の振興であった<sup>3</sup>。琵琶湖八景選定は、八景選定の目的が時代によって変化している可能性や、風景そのものに対する価値観が時代によって変化していることを示唆する。

平成30年(2018)、東近江市伊庭町(【図1】<sup>4</sup>)の水辺の景観が「伊庭内湖の農村景観」として国の重要文化的景観に選定された<sup>5</sup>。筆者は、同市文化的景観保存活用委員会委員として、この選定に向けて歴史的資料の調査を担当した。調査の過程で、明治時代の人の手になる伊庭町(明治時代は明治22年(1889)~同27年の期間を除き伊庭村)の風景評価をうかがわせる史料を発見した。この史料から、明治時代の伊庭村の風景のありようを復元することが、本稿の目的の一つである。

また、平成24年(2012)、京都大学大学院景観設計学研究室と伊庭町自治会との協働により、伊庭町の住民らの意見をもとに新たに「伊庭八景」が選定されている<sup>6</sup>。文化的景観の選定を目的とするわれわれ委員会の調査活動より以前のことである。こうした住民自ら選定した現代の八景と、明治時代の伊庭村の風景とのあいだの、連続性や非連続性について検討することが、本稿の二つ目の目的である。

## 第1章 現代の伊庭八景

東近江市伊庭町で伊庭八景として選ばれた8つの景観は、「今の八景」、及び「未来の八景」のいずれかに分類されている。「今の八景」とは、伊庭の住民にとって「今のままで素晴らしいところ/残していきたいところ」であり、「未来の八景」とは、「少し手を加えれば素晴らしいところ/これから良くしていきたいところ」である。すなわち、伊庭八景の選定とは、現在のすぐれた景観を評価するとともに

に、将来的な景観・環境保全を目指す取り組みであるといえる。

前述のように、八景という風景の評価様式は長い歴史を有するが、時代によってその目的を変化させてきた。観光振興と八景選定を連動させる動向が落ち着いた、特に1990年代以降には、環境保全や景観保全と八景選定とが結びつき<sup>7</sup>、現在まで続いている。伊庭八景の選定もこうした流れのなかに位置づけられることは明らかである。

選定された伊庭八景の一つ目の特徴は、八景のうち七景までが、川や内湖、堀など水にかかわる景観であることである。「今の八景」として選定されたのは「大濱神社と仁王堂」、「正厳寺と田舟」、「妙金剛寺川とホテル」の三景、「未来の八景」として選定されたのは「伊庭城址と堀」、「ヨシ原と内湖」、「妙楽寺と水路」、「卯の時祭と乗降場」、「金刀比羅神社と港跡」の五景であるが、八景のうち、「大濱神社と仁王堂」以外の七景が、水にかかわる風景である<sup>8</sup>。

これら八景の各地点を、伊庭町の地図<sup>9</sup>に落とし込んだのが、次の【図2】である。

町内の水辺の景観をいかに維持していくのか、これが伊庭八景選定時の住民の課題であったといえる。この問題意識は、行政側も共有しており、重要な文化的景観選定にかかるわれわれの調査活動にも継承された。現在、東近江市のホームページをみると、『伊庭の農村景観』とはという項目に「琵琶湖の内湖である伊庭内湖に面し、集落の背後に聳える織山とそこから内湖に流れ込む川と集落内に張り巡らされた水路を巡る水から生み出された文化的景観です。」<sup>10</sup>という簡潔、かつ的確な説明が付されている。

伊庭八景のもう一つの特徴は、【図2】に明らかのように、八景のうち「ヨシ原と内湖」、「金刀比羅神社と港跡」を除く六景が、伊庭町内の集落内に集中していることである。町内に残るすぐれた景観を後世に残すことが伊庭八景選定の目的であったが、住民のまなざしが、主として集落内の景観に向けられていることがうかがえる。

## 第2章 「詩集」の紹介

本章で紹介する史料は、明治14年(1881)1月5日から4月14日にかけて作成された、「詩集」という表題を有する帳面である。伊庭集落のほぼ中央部



図2 現代の伊庭八景

に位置する大規模寺院、浄土真宗本願寺派の妙楽寺が所蔵する古文書群のなかに含まれており、平成17年(2005)に調査をおこなった。

この詩集は、漢詩の詩集であり、全27首で構成されている。1月5日に作詩された冒頭の「春日閑居」をみよう。

### 【史料1】

春日閑居  
庭裏梅花已報春  
窓前日暖影尤新  
炉辺無客自閑坐  
黄鳥声鮮慰独身

一月五日作

(庭の裏の梅花が今まさに春を知らせようとしている。窓の前の日は暖かく、その影は新しい。炉の辺には客もなく、私は静かに座している。ウグイスが声鮮やかに一人身を慰めてくれる。)

この漢詩と同様、他の漢詩もすべて七文字四行の七言絶句であり、【表1】の「作詩順」のように配置されている。

表1 「詩集」を構成する各詩

作詩順	作詩月日・刻	分類	詩題	場所	景物	季節	時刻
1	1月5日	—	春日閑居	庭	—	春	昼
2	1月24日夕	—	湖山雪霽	湖山	雪霽	冬	夕
3	1月28日夜	—	寒中雷聲	葦畔	雷聲	冬	夜
4	2月3日	—	春曉聞鶯	庭	鶯	春	朝
5	2月5日夜	—	春江独釣	湖上	漁舟	春	夕
6	2月5日夜	—	春日望江	江	江	春	昼
7	2月10日	—	未開梅	庭	梅	春	昼
8	2月11日	—	春夜即事	—	地震	春	夜
9	2月15日	名勝型	大明神春色	大明神	春色	春	昼
10	2月15日	名勝型	郷頭野晴柳	郷頭野	晴柳	春	夕
11	2月18日	八景型	三橋夕照	三橋	夕照	春	夕
12	2月18日	八景型	川崙帰帆	川崙	帰帆	春	晩
13	2月20日	名勝型	湖東桃源	湖東	桃源	春	昼
14	2月20日	名勝型	柳出螢火	柳出	螢火	夏	夜
15	2月21日	名勝型	大風呂漁火	大風呂	漁火	夏	夜
16	3月2日	八景型	六町暁晴嵐	六町暁	晴嵐	夏	夕
17	3月3日	八景型	安政山落雁	安政山	落雁	秋	夕
18	3月4日	名勝型	桑原吟蟲	桑原	吟蟲	秋	夜
19	3月5日	名勝型	芝原月待	芝原	月待	冬	夜
20	3月5日	八景型	緞山暮雪	緞山	暮雪	冬	暮
21	3月6日	—	題美人図	—	美人	—	—
22	3月12日	—	春江泛舟	湖江	舟	春	夕
23	3月13日	—	春日雜感	—	—	春	昼
24	3月27日	—	半開梅	庭	梅	春	昼
25	3月30日	—	美人春睡図	—	美人	春	—
26	4月12日	—	春眠不覚暁	屋内	—	春	朝
27	4月14日	—	春日訪友人別荘	別荘	—	春	昼

【表1】「作詩月日」欄と【史料1】にみられるように、1 春日閑居(数字は「作詩順」欄の数字に対応する。以下同じ。)の詩が1月5日に詠まれ、その後、日付とともに各詩が記されている。27 春日訪友人別荘が4月14日の作である。また、「詩題」から推測できるように、これらの詩は、一部に23 春日雜感のように感情を読んだものや、21 題美人図のように美人の姿態を詠んだいわゆる艶体詩<sup>11</sup>もあるが、「場所」欄にみられるように、ほとんどが風景を詠んだものである。また、「季節」欄に「春」という文字が多いように、春の風景を題材とする漢詩が中心である。

作者については、史料内に記載がなく、関係史料も把握できておらず不明であるが、漢詩を作成する力量を持ち合わせている人物であることから、文化人としておこう。ただし、漢詩を構成するそれぞれの漢字には添削と思われる漢字が添えてある。自添削の可能性もないわけではないが、第三者の指導を受けていたことも想定される。明治前期に多数存在していた漢学塾<sup>12</sup>の課題であったのかもしれない。その場合、漢詩の詩題を第三者から与えられた可能性も想定しうるが、いずれにせよ、当時の人が評価していた風景を詠んだものと考えことは間違いではなからう。

次章で述べるように、多くの詩題に伊庭村の地名が含まれている。また、前述のように各詩に日付が付されており、特に7 未開梅と24 半開梅が、時間経過を如実に示すものであること、及び、そもそも本詩集が妙楽寺に残されていたことなどから、本詩集は、当時伊庭村に居住した文化人が、実際に伊庭村の景観をみて、あるいは念頭において詠んだ作品集であると推定できる。

なお、本稿では特に分析しないが、本詩集は作成された時期が興味深い。八景をはじめとする名所の定数化は、江戸時代から明治時代にかけておおいに流行する。これは、漢文学のまなざしで風景を発見する営みであるといわれるが、西欧の近代的風景観が入り込む明治後期になると、景物の固定化などその形骸化が批判を受けるようになる<sup>13</sup>。また、漢詩文の世界でも、明治10年代から同20年代にかけて、漢詩改良論と称される動きがあるといわれる<sup>14</sup>。この詩集は、そうした流れの過渡期に成立した作品なのである。

### 第3章 「詩集」の内容分類と特徴

#### (1) 内容分類

【表1】の「分類」欄にみられるように、全27首は大きく3種類に分類できる。



(a) 近江八景を意識した漢詩

【表1】で「八景型」に分類したものである。人口に膾炙する近江八景は、「石山秋月」（石山寺）、「瀬田夕照」（瀬田の唐橋）、「粟津晴嵐」（粟津原）、「矢橋帰帆」（矢橋）、「三井晩鐘」（三井寺）、「唐崎夜雨」（唐崎神社）、「堅田落雁」（浮御堂）、「比良暮雪」（比良山系）の8つの風景から構成されるものである。知られているように近江八景は湖南部に集中しており、伊庭村には該当する場所はない。

近江八景は、江戸時代の旅行文化の発達により全国的に知られるようになった。また、近江八景の登場を受け、各地で八景が選定されているが、江戸時代の各地の八景に多くみられたのは、「秋月」、「夕照」などの景物を示す語句の前に、地名を冠するという方法で、いわば近江八景のうつつ的な要素が強いといえる。

この基準で「詩集」をみると、【表1】の「分類」欄の「八景型」に該当する11三橋夕照、12川崙帰帆、16六町暎晴嵐、17安政山落雁、20叡山暮雪の5首が、それぞれ夕照・帰帆・晴嵐・落雁・暮雪という景物を含み、近江八景を意識した詩であることがみてとれる。また、それぞれに付属する三橋・川崙・六町暎・安政山・叡山は、いずれも伊庭村に存在する地名である。

こうした点から、本詩集の作者は、江戸時代の人々と同じく伊庭村の美しい風景を近江八景になぞらえようという意識をもっていたことがわかる。なお、近江八景のうち、秋月と晩鐘、および夜雨の三景は読み込まれていない。この理由については明らかではないが、伊庭村内には該当する場所が存在しなかったのであろうか。

(b) 伊庭村内の地名が読み込まれた漢詩

本詩集の特徴は、伊庭村内の地名が多くみられる点である。また、近江八景を意識した詩の数よりも伊庭村の風景を独自に詠んだと考えられる詩が多い。「分類」欄に「八景型」とともに「名勝型」と記したのが、伊庭村の地名を詩題にもつ、あるいは、内容から明らかに伊庭村の風景であると判断できる漢詩である。作詩順に挙げると、9大明神春色、10郷頭野晴柳、11三橋夕照、12川崙帰帆、13湖東桃源、14柳出螢火、15大風呂漁火、16六町暎晴嵐、17安政山落雁、18桑原吟蟲、19芝原月待、20叡山暮雪の12首である。このうち、(a)に分類し

た近江八景を意識した5首を除くと、作者独自の題を持つ漢詩としては7首が該当する。9大明神春色（【史料2】）、10郷頭野晴柳（【史料3】）、13湖東桃源（【史料8】）、14柳出螢火（【史料4】）、15大風呂漁火（【史料5】）、18桑原吟蟲（【史料6】）、19芝原月待（【史料7】）の7首である。

【史料2】

大明神春色  
晴霞帯処両三松  
四面菜花春色濃  
今古伝聞江海畔  
淡公垂釣策鯉蹤  
二月十五日作

【史料3】

郷頭野晴柳  
斜照暉々湖面鮮  
晴霞燦々帶山巔  
柳楊裊々映波上  
好景難図難又伝  
二月十五日作

【史料4】

柳出螢火  
斜陽既没柳青々  
吹送涼風流水冷  
訝見光明千万点  
何非銀漢是飛螢  
二月廿日

【史料5】

大風呂漁火  
斜陽既没尚炎風  
酷暑絺衣汗未融  
自追涼氣臻海畔  
映波漁火興不窮  
二月廿一日

【史料6】

桑原吟蟲  
秋風寂々月光昏  
叢裏濃々白露繁  
連夜万蟲吟不穩  
誰知此處是桑原  
三月四日

【史料7】

芝原月待  
滿天如凍冷風歎

一夜爰来動客思  
雲外飛魂鵲一嘯  
芝原絶景月昇時  
三月五日

【史料6】などをみると、これらの詩は、必ずしも春に詠まれたものではないことがわかる。【表1】の9から20までの詩の「季節」欄をみると、春、夏、秋、冬の順番に数首ずつ作詩がおこなわれたようである。ただ、いずれにせよ、春の日中の「大明神」、晩春の夕方の「郷頭野」、蛍の季節の夜の「柳出」など、伊庭村の景観の美しさが復元できる。

これらのうち、特に注目されるのは、13湖東桃源である。

【史料8】

湖東桃源  
桃花満々照乾坤  
習々春風香気翻  
全国無双伊浦里  
居人自説武陵源  
二月廿日

(桃の花が満ち満ちて天地の間を照らしている。そよそよとした春風が香気をひるがえす。伊庭の里は他の地に比べようがないほどすばらしい。住人は中国の武陵桃源のようだという。)

伊庭村では、かつて「伊庭桃」と呼ばれる小ぶりの桃が特産品として栽培され、桃木が林立する景観がみられたという<sup>15</sup>。『滋賀県管内神崎郡誌』には、「伊庭、乙女浜の村落は、数千の桃樹、民屋を繞るを以て、花時の光景さながらも仙窟に入るが如し」<sup>16</sup>とあり、まさにこの文章に記されている光景が、漢詩として詠まれていることがわかる。しかし、その後、伊庭桃の栽培は途絶え、現在では桃樹の植栽もほとんど見られず、こうした風景を想像することは難しい<sup>17</sup>。【史料8】からは、明治14年ごろには伊庭桃の花が咲き誇り、芳香の立ち込める光景がみられることや、住民がその状況を桃源郷にたとえ、誇らしく感じていることがうかがえる。

この他の詩も、明治14年当時の伊庭村の様相を詠じたものであると考えてよからう。これら12首の漢詩の表す風景を、その数から便宜的に「伊庭一二景」と名づける。

(c) 伊庭村内の地名が読み込まれていない漢詩

前記(a)・(b)に該当する詩を除いた残りの詩は、「分類」欄に「一」としてある。1春日閑居、2湖山雪霽、3寒中雷聲、4春暁聞鶯、5春江独釣、6春日望江、7未開梅、8春夜即事、21題美人図、22春江泛舟、23春日雜感、24半開梅、25美人春睡図、26春眠不覺曉、27春日訪友人別荘が該当する。詩題を見ると特定の場所で詠まれたという印象はないため、八景型や名勝型とは区別した。

【表1】から(c)に該当する詩の番号を改めて確認すると、1～8と21～27となる。間に位置する9～20の詩は、(a)、及び(b)に分類した伊庭村の地名を詩題に含む詩である。すなわち、作者は、詩集の冒頭を場所性の弱い漢詩作成にあてて1～8の詩を詠み、その後9～20として伊庭村のすぐれた風景を詠み、その終了後、21以降で場所性の弱い詠草に再度移ったと考えられる。なお、いくつかの詩題にみられる「春日」は、伊庭村内にも地名として存在するが、前掲【史料1】春日閑居に見られるように、詩の内容からも特定の場所を示しているとは読み取れず、単なる「春の日」であると理解した方がよい。

(2) 内容の特徴

本詩集が、伊庭村の実際の風景を詠んだ詩を多く収録していることは明白であろう。さらに、その内容を見ていくと、琵琶湖や川など水辺を詠んだ詩や、伊庭村が水辺に立地することに由来する詩が多いことに気付く。改めて(a)・(b)・(c)の分類を示すとともに、各詩にみられる水にかかわる詩句を【表2】としてまとめた。

「分類2」欄で「伊庭一二景」とした漢詩の詩句をみると、水辺を表現する詩句は、9大明神春色の「江海畔」、「垂釣」、10郷頭野晴柳の「湖面」、「波」、11三橋夕照の「流水」、「浪面」、12川壽婦帆の「琵琶湖」、14柳出螢火の「流水」、15大風呂漁火の「海畔」、「映波漁火」、16六町暁晴嵐の「漁父声」、17安政山落雁の「大湖」である。一見したところ詩題のみでは水との関連がうかがいにくい詩にも、水に関連する詩句が読み込まれている。これらは、水辺に位置する伊庭村ならではの景観を詠んだものであり、伊庭村のすぐれた風景は、圧倒的に水辺に由来していたといえる。

【図3】<sup>18</sup>は、明治26年(1893)と平成18年(2006)

表2 各詩にみられる水にかかわる詩句

作詩順	分類1	分類2	詩題	水にかかわる詩句
1	(c)	—	春日閑居	—
2	(c)	—	湖山雪霽	「金波漲々」
3	(c)	—	寒中雷聲	「蘆畔」
4	(c)	—	春曉聞鶯	—
5	(c)	—	春江独釣	「湖上」「漁舟」「釣魚」
6	(c)	—	春日望江	「春湖」「柳畔」
7	(c)	—	未開梅	—
8	(c)	—	春夜即事	—
9	(b)	伊庭一二景	大明神春色	「江海畔」、「垂釣」
10	(b)	伊庭一二景	郷頭野晴柳	「湖面」、「波」
11	(a) (b)	伊庭一二景	三橋夕照	「流水」、「浪面」
12	(a) (b)	伊庭一二景	川寄帰帆	「琵琶湖」
13	(b)	伊庭一二景	湖東桃源	—
14	(b)	伊庭一二景	柳出螢火	「流水」
15	(b)	伊庭一二景	大風呂漁火	「海畔」、「映波漁火」
16	(a) (b)	伊庭一二景	六町暁晴嵐	「漁父声」
17	(a) (b)	伊庭一二景	安政山落雁	「大湖」
18	(b)	伊庭一二景	桑原吟蟲	—
19	(b)	伊庭一二景	芝原月待	—
20	(a) (b)	伊庭一二景	織山暮雪	—
21	(c)	—	題美人図	—
22	(c)	—	春江泛舟	「湖江」「船」
23	(c)	—	春日雜感	—
24	(c)	—	半開梅	—
25	(c)	—	美人春睡図	—
26	(c)	—	春眠不覚曉	—
27	(c)	—	春日訪友人別荘	—

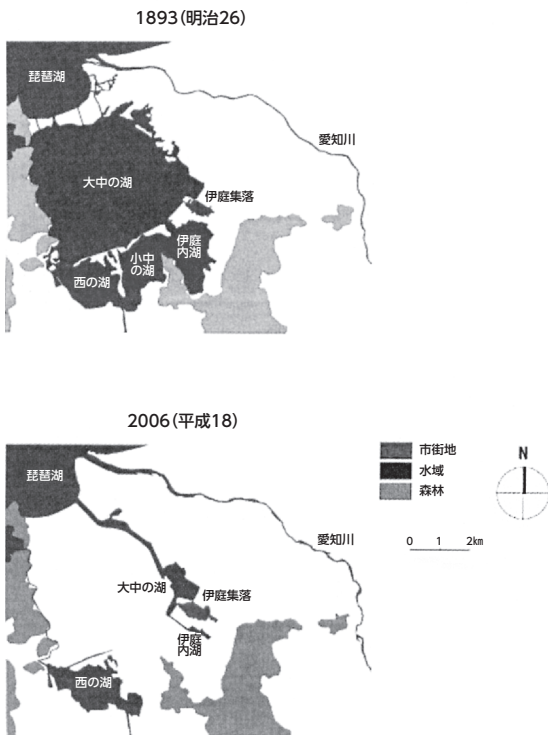


図3 伊庭集落周辺の水域変化

の伊庭集落周辺の内湖<sup>19</sup>の面積の変化を図示したものである。

埋め立てられる前の大中の湖と伊庭内湖という2つの内湖が、かつて非常におおきな水域であったことがうかがわれる。明治時代には、住民の生業として漁業が営まれていたことや、農業用に田舟が欠かせなかったこと<sup>20</sup>などを合わせて考えれば、現在よりもはるかに水が身近なものであったのであろう。

また、(c)に分類される詩は、自らの感情を詠んだものなど場所性がないものであるが、2湖山雪霽など「湖」という語が含まれていることから、おそらくは伊庭村の風景を詠んだものであろう。同じく、5春江独釣、6春日望江、22春江泛舟なども、「江」という文字に見られるように、伊庭村における水辺の風景のすばらしさを詠んだものであろう。

なお、伊庭一二景を、地名をもとに地図<sup>21</sup>上に落とした<sup>22</sup>ものが【図4】である。

【図4】を前掲【図2】と比較して気付くのが、伊庭一二景には、伊庭村の集落部を読み込んだと思われる詩がほとんど存在しないことである。【史料8】として掲載した13湖東桃源のみが該当しよう。それ以外の一一景の半数は、集落から外れた湖岸に近い場所に位置するか、湖岸を見通した場所であ

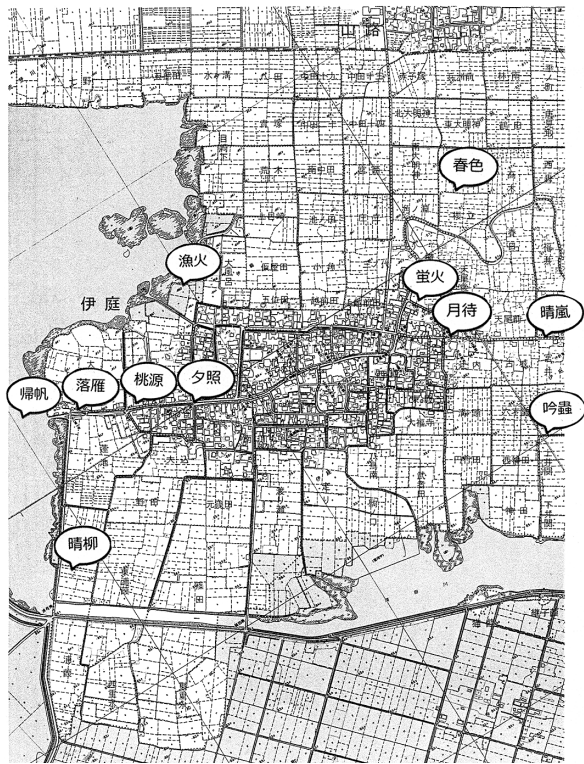


図4 明治時代の伊庭一二景

る。また、残り半数は、20織山暮雪のように地図外に位置する遠景を含む、集落部からみて内陸部に位置する。明治時代の伊庭村の文化人は、集落外にすぐれた風景を見出していたのである。

### おわりに

東近江市伊庭町に残された「詩集」の分析から、明治時代の伊庭村のすぐれた風景を伊庭一二景として紹介した。一二景のうち、五景が近江八景の景物を詠んでいることから考えると、伊庭一二景は、近江八景の変型判であるといえるかもしれない。また、一二景に限らず、伊庭村の春夏秋冬のすぐれた風景の多くが、水に由来するものであることがわかった。これは、現代の伊庭八景にも共通する性格である。

一方、現代の伊庭八景に選定された地点が、ほぼ集落内に限定されているのに対して、明治時代の伊庭一二景が集落部ではなく集落の外側に展開していることは、おおきな相違点である。これは、すぐれ

た景色をそのまま芸術として表現した伊庭一二景とは異なり、伊庭八景選定の目的が景観や環境の保全にあったことによるのだろう。

しかし、いずれにせよ、伊庭に住む人々が、過去も現在も水辺に心を奪われ、誇りや安らぎを感じていることは明らかである。このたびの重要文化的景観の選定をさらなる好機として、伊庭町のすぐれた景観を後世に残していただきたいものである。

### 【付記】

本稿は、平成31年(2019)2月16日に伊庭町謹節館で開催された重要文化的景観「伊庭内湖の農村景観」景観報告会における拙報告「明治時代の伊庭の景観—ある文化人の八景—」を基にしている。妙楽寺様をはじめとして、事前の史料調査にご協力いただいたみなさま、および、報告当日に伊庭町内の地名に関してご教示くださった町民のみなさまに、この場をかりて御礼申し上げます。

暮雪  
織山

い。なお、本稿は、JSPS 科研費15H03248の助成をうけたものである。

### 註

- 1 本稿では、「風景」と「景観」という用語を、「個人の目に映じたものを、日本では風景と表現してきた。」「景観のほうが風景よりも客観的な側面を重視した、少なくとも重視した方向性を有する語として使用されている。」という金田章裕の説明にしたがって使い分けている(金田章裕『文化的景観—生活となりわいの物語—』、日本経済新聞出版社、2012年)。
- 2 青木陽二・榊原映子編『国立環境研究所研究報告第197号 八景の分布と最近の研究動向—過去の景観評価データ—』(国立環境研究所、2002年)。
- 3 『近江八景から琵琶湖八景へ』(彦根城博物館、2005年)。
- 4 『能登川地区古文書調査報告書10 伊庭町共有文書目録』(東近江市教育委員会、2007年)より



転載。

- 5 平成30年(2018)10月15日付官報告示(号外第226号)。
- 6 『景観まちづくり通信・伊庭 NO. 2 かげすずし』(東近江市都市計画課、2013年)。
- 7 前注(2)。
- 8 前注(6)。
- 9 「能登川の歴史」編集委員会『明治の古地図 能登川』(東近江市、2008年)の「伊庭」図に加筆。本来は現在の地図を用いるべきだが、後掲【図4】との対比のため、同一の図を用いた。図中では、「大濱神社と仁王堂」を「大濱神社」のように省略している。なお、「ヨシ原と内湖」については、伊庭の里湖づくり協議会が開催している「伊庭内湖ヨシ刈り」事業の会場となっている「大風呂」周辺に配置した。
- 10 <https://www.city.higashiomi.shiga.jp/0000008894.html> (2019年8月17日閲覧)。
- 11 合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』(和泉書院、2014年)によれば、艶体詩は明治10年代前半に爆発的に流行するが、明治10年代後半以降に終息を迎えるという。
- 12 本山幸彦編『明治前期学校成立史』(未来社、1965年)。ただし、伊庭村民の漢学学習環境については未検討である。
- 13 前注(2)。
- 14 前注(11)。
- 15 『文化的景観「伊庭内湖と水路の村」調査報告』(東近江市、2017年)。
- 16 松浦果編『滋賀県管内神崎郡誌』(1880年)。
- 17 前注(15)。現在、伊庭桃の廃絶を惜しむ住民により伊庭桃復活の運動がみられる。
- 18 前注(15)より転載。
- 19 内湖とは、琵琶湖岸に存在する潟湖をいう。
- 20 前注(15)。
- 21 前注(9)。
- 22 例えば、地図上にみられる「春色」は、19大明神春色の舞台である地字「大明神」の位置に配置した。他の漢詩についても同様であるが、14柳出螢火の「柳出」地字が不明なため、「柳原」に配置している。なお、「暮雪」の織山は【図4】外にあたる。